おしいれ。

池野さざなみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
おしいれ。

【Ｎコード】
Ｎ４１９２Ｍ

【作者名】
池野さざなみ

【あらすじ】
大学生の由美は、人の顔を覚えるのが苦手。ある日、友達の友達が頼み事をしてきた。一週間のお泊りの話。挿絵付き。

友達の友達

>i9313<ruby><rb>386<rp>（</rp><rt>ゆみ</rt><rp>）</rp></ruby>ちゃん、今夜泊めてくれない？」

放課後の教室で背後から声をかけられて、わたしは振り返った。
後ろにいたのは、茶髪のショートヘアの女の子。どこかで見たことのある顔だった。

「えっと……、」

女の子を見詰めて言葉をつまらせるわたし。
彼女の名前は何だっけ？

記憶をたぐりよせるけど、なかなか思い出せない。
わたしの気持ちがわかったのか、女の子はさらさらの髪を揺らして自分の名前を言った。

「わたし、聡子（さとこ）だよ。覚えてないかな？　この間、一緒にカラオケ行ったんだけど」

「ああ、晴香（はるか）の友達」

わたしの言葉に、女の子はうなづいた。
なるほど覚えていないわけだ。彼女は友達の友達。
四月に大学に入ってから、まだ一ヶ月しか経っていない。

正直、人の顔を覚えるのは苦手だった。

なんて返事したらいいかわからず、ただ黙っているわたし。
女の子はアイラインばっちりのぱっちりした目で、こっちを見詰めている。

「ねぇ、だめかな？　一週間だけでいいから、泊めてほしいの」

女の子がもう一回同じことを言った。
泊める。一週間。
名前も知らなかった女の子を？

とまどっているわたしを、女の子はうるんだ目でみている。
まるで子犬のような眼差しに、わたしはついつい根負けしてしまった。

「うん、いいよ」

「ほんと？　やったー！　ありがとう由美ちゃん」

両手を挙げて、女の子がぴょんぴょん跳ねる。とっても嬉しそうだ。

ああそうだ、いつから泊まるかきいておかないと。
一人暮らしだから親のことは気にしなくていいけど、あの散らかった部屋を見られるのは恥ずかしい。
わたしはクールでキレイ好き、ということになっているのだ。
彼女が泊まりにくる前に、部屋を片付けなくっちゃ。

「いつから泊まりにくる？　金曜日？　」

ぼんやりとそう考えながら、わたしはたずねた。
女の子はにっこり笑って、そうまるで天使のような微笑で、わたしの問いに答えた。

「今から」

どさり、と音がして、わたしの眼が無意識にそっちを見る。
大きな大きなボストンバッグが、いもむしみたいに机に乗っかっている。

「――え？　」

思わずききかえしてしまった。
女の子は相変わらずにっこり笑っている。天使のような笑顔で。
生を感じさせない微笑で。
その表情には、有無を言わせない雰囲気があった。
わたしはそれ以上何も言えなかった。

五月の昼下がり、ツツジがキレイな大学の教室の中で。

バッグの中身

いきなり泊めて欲しいという無理なお願いに、わたしは混乱していた。
一度「いいよ」と言ってしまったら、「やっぱりだめ」とは言いにくい。

ぐるぐると悩んでいる間に、わたしは聡子ちゃんに連れられて気が付いたら地下鉄に乗っていた。

「……でね、バイトの先輩とメアド交換したいなーって」

「ああ、うん」

一人でよく喋る彼女に生返事をする。
彼女は楽しそうに話を続ける。

肩から下がるボストンバッグが、ゆらゆらと不安定に揺れていた。

それなりに話をして、それなりに彼女がどういう人間か分かってきた。
明るくて可愛くて、行動的にみえて、本当は内気。人の目が気になって仕方ない。
ほんの数ヶ月前まで高校生だった気分を、そのまま引き摺っている。
そんなどこにでもいる女の子。

「ねぇねぇ、由美ちゃんはどんなタイプの子が好きなの？　」

「……うーん」

揺れる地下鉄の車両の中で、よくある恋愛談義。
家に着くまでの間、他愛ない話をたくさんして、それなりに仲良くなった気がした。

「ここが由美ちゃんの家かー」

茶髪を揺らして、聡子ちゃんが古いアパートを見上げた。
白いタイルが黄色くなった、五階建てのアパート。

「何階？　」

「五階だよ。今、エレベータ壊れてるから階段でのぼるけど」

「えー、そんなぁ」

大きなボストンバッグを肩から下ろして、聡子ちゃんがその場に座り込んだ。
そんなと言われても、エレベータは使えない。
誰かが階表示のボタンに悪戯（いたずら）したから。

「明後日には修理終わるって。階段のぼるの嫌だったら、修理終わってから泊まりにおいでよ」

「え、それはダメ」

急に立ち上がり、聡子ちゃんは階段をのぼり始めた。

絶対に自分の家に帰りたくないみたいだけど、何があったんだろう？

そんなことを考えながら、彼女の後をついてのぼる。

五階につく頃には、聡子ちゃんはすっかり疲れ切っていた。

はぁはぁと肩で息をする彼女の横で、家の鍵を取り出す。

ドアを開けると、何かの勧誘のチラシが数枚入っていた。

玄関で靴を脱ぐわたしの後に、聡子ちゃんも続く。

「あれ、ワンルームかと思ったけど、けっこう広いんだね」

感想にうなづく。

間取りは２ＤＫだ。

本当はもう少し狭い部屋でもよかったけど、合格が決まったのが遅かったから学生向けの物件は残っていなかった。

もちろん広さを持て余していて、北側の部屋は物置になっている。

この数週間、部屋のドアを開けたこともない。

フローリングの床を軋ませて、彼女を南側の部屋に案内した。

ふすまをひく音に、聡子ちゃんが一瞬びくんと震えるのが見えた。

「え、和室？　」

「うん。畳（たたみ）のほうが落ち着くから」

嫌そうな顔をする聡子ちゃんに背を向けて、荷物を畳に下ろす。

押入れから布団を出すわたしを見て、聡子ちゃんがぽつりと呟いた。

「おしいれ、あるんだ……」

「……？」

振り返って見た聡子ちゃんの顔は、無表情で、なんだか生きてる人じゃない感じだった。

まるで真黒な穴みたいな目だ。

おもわず布団から手を離してしまった。

布団が落ちる音を聞いて、聡子ちゃんの顔にも表情が戻った。

困ったような顔をして、わたしから目を背けている。

「えっと、お風呂借りてもいいかな。階段のぼって汗かいちゃった」

「――うん。あ、蛇口はレバーを上げたらお湯が出るからね」

バッグからバスタオルを出すと、聡子ちゃんはお風呂場へ行った。

だらしなく開いたバッグの口の中が、光の加減で蠢(うごめ)いているように見えた。

うん、きっと気のせいだと思う。

もの音

それから数分後。

聡子ちゃんはお風呂に入っている。

開けっ放しのボストンバッグを眺めていたわたしは、ごはんを作るため台所に立った。

野菜を洗うために触れた蛇口が、ひんやりと手に温度を伝える。

その冷たさが背筋を震わせ、なんだか妙に心細くなった。

ぶるっと体をふるうと、野菜包丁を手に握る。

「……もう、考えすぎよ。あの子はただ、泊まりにきただけじゃない」

そう、それ以上でも以下でもない。

けれど、なぜか不安になるのだった。

心の中にうずまくモヤモヤを紛(まぎ)らわすために、キャベツを細かく刻む。

トントンと一定のリズムに合わせて、聞きなれない物音がした。

「――？」

手を止めて、耳をすませる。

聞こえるのはただ、聡子ちゃんが歌う調子はずれの流行歌。

「気のせい、かな……」

キャベツを千切りする作業に戻ろうとした、その時。

がたん。

と、大きな音がした。

「――！」

間違いない、今度こそ。

思わず身がすくみ、包丁を取り落としてしまった。

真直ぐに落ちた包丁が、床に当たって跳ねる。

それにあわせるように、もう一度。

がたん。

「な、なに――？」

震える手で包丁を拾い、わたしは家の中を見回す。

そんなことをしても、音のもとなど見つかるはずもなく。

「……聡子ちゃん？　さっきの音、聞こえた？」

お風呂場の戸の向こうに呼びかけても、聞こえるのは調子はずれな歌だけ。

なんだかとっても不安だ。

なんだかとっても心細い。

こんな気持ちは、引越しを手伝ってくれたお母さんが、実家に帰

ってしまったとき以来。

いつのまにか、ひざまで震えていた。

布団に潜り込んで寝てしまおうと駆け出したそのとき、玄関扉の向こうで誰かの声が聞こえた。

「そと……？　」

振り返るわたしの目に映ったのは、少しペンキのはがれた玄関扉。その覗き穴に目を当てて外を覗く。誰もいない。

ううん、今何か見えた？

包丁をケースに戻し、わたしは恐る恐るドアノブを回した。

ただ、確認したかった。確認して、恐怖の源の正体を知って、なぁんだ、と安心したかった。

「えいっ」

思い切って玄関扉を開けたそこには。

誰もいなかった。

二戸しかない短い廊下は、がらんとしていて人気もない。

「……やっぱり、気のせいだったのかな」

つぶやくわたしの耳に、小さな物音が聞こえた。

カタカタ、カタカタ。

下のほうから聞こえてくる。
周りを見回し、足元を見下ろす。いつもと何も変わらない。

カタカタ、カタカタ。

止まらない物音。

だけど、今度は怖くなかった。
わたしはそのまま廊下の手すりのほうへ進む。
身を乗り出して見つけたものは。
風に揺れる排水パイプだった。

「――なぁんだ。これの音だったのね」

ほっと胸を撫で下ろし、わたしは家の中へ駆け足で戻っていく。
それを急かすように、排水パイプは身を震わせて音を立て続けた。

カタカタ、カタカタ。
カタカタ、カタカタ、と。

白の線

妙な物音の元を確認して、わたしは家に帰った。
玄関扉がちょっとさびついた音を立てて閉まる。

ふっと目を上げると、台所にバスタオルを巻いた聡子ちゃんが立っていた。

「あ、もうちょっとで晩ごはんできるから――」

声をかけようとしたわたしは、言葉を飲み込み口を噤む。

まだ湯気の立つ聡子ちゃんの白い腕に、調味入れが抱かれていた。
四角い調味入れの中に聡子ちゃんの手が伸び、白い粉をつまむ。

塩だ。

ぼんやりとそう認識する。
塩を摘んだ聡子ちゃんの指は、そのまま口元へ。
ぺろり、と、聡子ちゃんは塩を舐めた。

薄紅色の唇には、白い結晶がたくさんついている。
調味入れの中身は、かなり減っていた。

「聡子ちゃん……何してるの？」

おそるおそる声をかける。

わたしに気付いた聡子ちゃんは、調味入れを棚に戻した。

「……うん、なんでもないよー」

蛇口を捻り、聡子ちゃんが手を洗う。

「ほら、塩分補給？　お風呂で汗いっぱいかいたから」

にこにこと微笑みながら、聡子ちゃんが手を洗う。

塩はとっくに落ちている。

何か変だ。

もやもやした気持ちで立ち尽くしていると、インターホンが鳴った。

こんな時間に誰だろう。

玄関の覗き窓から外を見ると、近所の中華飯店の人が立っていた。

「あのー、宅配なんですけど。ラーメンセット頼んだ方ですよね」

分厚い鉄のドア越しに、男の人の声。足元には見慣れた鉄製の箱。

でも、頼んだ覚えは無い。

「……聡子ちゃん、もしかしてラーメン頼んだ？」

台所を振り返ると、聡子ちゃんはもういなかった。

南の部屋に居ても、声は聞こえるはずだ。

返事を待ったけど、何も聞こえなかった。

中華飯店の店員さんは、じれったそうに玄関扉の前で腕を組んで

いる。

「うちは頼んでいないんですけど」

「え？　でも、ここグリーンハイツの五〇一号室ですよね？　」

店員さんが、胸ポケットからメモを取り出して読み上げた。

住所は合ってる。

どうしようかと戸惑っていたそのとき、隣の玄関扉が開く音がした。

「あ、すいませーん。ラーメン頼んだの俺です」

号数間違えちゃって、と隣の人が言い訳をしている。

なんだ、隣の人が頼んだのか。

覗き窓の向こうから店員さんの姿が消え、隣の人に注文の品を渡す音が聞こえた。

隣に住んでいるのが男の人だというのは知ってた。

けど、いつもいないから、声を聞くのは初めてだった。

胸を撫で下ろして台所へ戻ると、レトルトパックを湯煎する。

炊飯器の音が、ご飯の炊けたことを知らせてくれる。

簡単な料理をつくって、それを聡子ちゃんと食べて。

ぬるくなったお風呂に入って、南の部屋に戻ると。

「……？　」

布団を敷いた畳の上に、細くて白い線が一本。
見慣れない線を、目が追う。
押入れのほうから、白い線が延びていた。
「なに、これ……」
しゃがみこんで近くで見ると、それは塩だった。
聡子ちゃんは居間でテレビを見ている。
「ねぇ、これ聡子ちゃんがしたの？　」
居間を振り返って尋ねるけれど、返事は聞こえない。
何か変なことする子、だなぁ。
掃除機を出して塩を片付けると、わたしは電気を消して布団にもぐりこんだ。
ふすまから漏れる居間の光が、妙に青白かった。

次の日。
すずめのさえずりで目を覚ますと、聡子ちゃんはいなかった。
ただ、食卓代わりのローテーブルの上に、一枚の白い紙。
『サークルの活動があるから、先大学行ってるね。夜は一緒に帰ろ』

五月の透き通った光と、寝ぼけた頭で。
置手紙の内容はどうにも非現実的だった。

晴香の忠告

地下鉄に揺られ、坂をのぼり。
五月の陽光に照らされた大学で、わたしは空き時間を潰していた。

今日は二時限目からしか講義がない。

大学内のカフェテラスで教科書を読み、晴香が来るのを待つ。
今日も大学内は人でいっぱいだ。
昨日あれほど不安だった気持ちも、人に囲まれると薄れてきた。

空き時間をそれぞれに過ごす学生達を眺めるわたし。
ひときわ大きな笑い声に、ふと視線が向かう。
聡子ちゃんだ。

「あ……」

手を振りかけて、途中でやめた。
聡子ちゃんはわたしの知らない人に囲まれて、楽しそうに笑っている。

サークルの仲間なのかな。

「よっ、由美。おはよー」

聞きなれた声に、わたしは我に返った。晴香だ。
振り返りかけるわたしの顔を、晴香がのぞきこむ。

「どしたの？　ぼーっとしちゃって。空でも見てた？　」

黒のボブに銀縁のめがね。晴香は今日も元気そうだ。
生返事をするわたしの肩ごしに、晴香が向こうの景色を眺める。
そして聡子ちゃんに気が付き、名前を呼んだ。聡子ちゃんも手を振って微笑んでいる。

「あ、そろそろ講義始まるよ。行こ、由美」

またねー、と晴香が手を振り、わたしたちは講義室へ向かった。

長い講義の後のお昼休み。
少し肌寒いけど、天気がいいからお昼は外で食べることになった。
自作の弁当を頬張(ほおば)る晴香。わたしの手にはサンドイッチ。

「――由美。なんか元気ないね？　」

晴香はいつも鋭い。

「うん……。ちょっと困ったことがあって」

「え？　何々？　言ってみ」

「うーん……」

聡子ちゃんは晴香の友達だし、昨日のことをそのまま話すのは、

ちょっと抵抗があった。

少し考えた後に、わたしは晴香に尋ねる。

「晴香はさ、誰かが急に一週間泊めてって言ったら、どうする？」

もちろん内容はぼかして。

わたしの質問に、晴香は眉根を寄せて変な顔をした。

「え、断るけど。普通に。だってウチ汚いもん」

「だよね……」

断りきれずに流されてしまった自分が情けない。

しらずしらず、顔がうつむいていく。

晴香がそれをのぞきこみ、銀縁のめがねを指で押し上げた。

「もしかして、由美、変な人に絡まれてる？　何かあったら、ちゃんとわたしに言いなさいよ？」

「うん」

「うん、って軽いなぁー。ひとり暮らしなんだからね？　もしものことがあっても、ご両親はすぐ来てくれないぞ？」

ちょっとふざけた口調で、晴香が人差し指をふった。

冗談に笑いきれず、微妙な表情になる。

それを見て、晴香は肩をすくめた。

「――ま、由美のことだから、大事に至る前に自分でなんとかでき

るよね。……もし、一人でなんともできなくなったら、いつでも電話してきていーよ。わたし夜型だから、三時とか四時でも起きてるし」

だから昼間は眠いんだけどねー、と、晴香が大きなあくびをした。

そのままお弁当を食べ始める晴香の前で、わたしはきっと暗い表情をしていただろう。

爽やかな五月の陽光とは反対に、わたしの心にはまた不安の闇が押し寄せてきていた。

断る……。

そう、断るのもいいかもしれない。

聡子ちゃんには悪いけど、この不気味な感情の揺らぎを抱えたままじゃ、まともに生活もできない。

だから今日の帰り道、事情を話して帰ってもらおう。

「あ、そういえばさー、今朝のニュース見た？　女子大生が箱に入れられて死体で見つかったんだって。けっこー大学の近所だったよ。怖いよねー、わたしたちも気をつけなくっちゃ」

晴香がのんきな声で不気味なことを言っている。

けれど、それはわたしの耳にほとんど入ってこなかった。

頭の中は、ひとつのことでいっぱい。

晴香ちゃんに帰ってもらう。

不思議と、そう考えるだけで、不安定な気分が落ち着いていく。

それから放課後までずっと、わたしはうわのそらだった。

夜の戯事

全ての講義が終わって、わたしはカフェテラスで聡子ちゃんを待っていた。
五月の陽は傾いて、空がきれいなバラ色に染まっている。
カラスが鳴いて、わたしは携帯電話を取り出した。
四時五十分。
溜息をついて携帯電話をしまおうとすると、メールの着信音がした。
「……聡子ちゃんからだ」
液晶画面をスライドさせてボタンを押す。
『改札の中で待ってるよ・』
「……文字化けしてるし」
いつのまに、大学から出ていたんだろう。
正門を見下ろす場所に立つテラスから、わたしは駅へ向かう学生達を眺めた。
じっと見ていたけど、聡子ちゃんらしき姿は見えなかった。
他の門から駅に向かったのかな。
「きっと、そうよ」

彼女にだって付き合いがあるし、サークルの友達と途中まで一緒だったのかも。

携帯電話片手に、わたしは席を立った。

先払いのレジを通り抜け、足早に駅へと向かう。

坂を下った駅の中で、聡子ちゃんは携帯電話をいじっていた。

握っていた携帯電話から、またメールの着信音がする。

それに気付いた聡子ちゃんが、携帯電話から顔を上げた。

「あ、由美ちゃん。ごめん、メールいっぱい送っちゃった」

「……聡子ちゃん、ちょっと話したいことがあるんだけど」

駆け寄ってきた聡子ちゃんが、首を傾げる。茶髪のショートカットが揺れて、さらさらと音をたてた。

「あのね、うちに泊まるの――」

「やだ、帰りたくない」

二言も喋り終わらないうちに、わたしの声は聡子ちゃんのそれに掻き消された。

眉根を寄せるわたしの前で、聡子ちゃんはTシャツの襟首をぎゅっと握っている。

白くて細い指が、カタカタと震えていた。

「帰りたくないの……」
「どうして？　」
尋ねるわたし。
沈黙する聡子ちゃん。
……彼女は何を恐れているんだろうか。
そう困惑していると。
突然、聡子ちゃんがわたしの胸に飛び込んできた。
「――？　」
「ニュースで報道されたアレ……わたしの家のすぐ近くのことなの。まだ報道されてないけど、もう何人も行方不明になってる。だからわたし、怖くて――帰りたくない」
「えっ……」
お昼に晴香が言っていたニュースの内容が、わたしの頭にフラッシュバックする。
箱に入ってみつかった、女子大生の遺体。
その近所に住んでいるという聡子ちゃん。
なるほど確かに、恐怖を感じて少しでも遠くに行きたくなるだろう。
でも……。
テレビクルーが取材にくる前から、彼女はこのことを知っていた

？

胸元で泣きじゃくる聡子ちゃんの頭を撫でて、わたしは事件に思いを馳せた。

女の子が泣いてるのが珍しいのか、皆こっちを見ながら改札を通っていく。

霞がかかったように、うまく考えが纏められない。

ここじゃだめだ。家に帰ろう。

さらさらの髪を撫でながら、わたしは聡子ちゃんの顔を覗き込んだ。

こんな風に泣かれちゃ、追い返すこともできないし。

「ごめんね、そんな事情があったなんて知らなかったから。さ、帰ろっか」

「――うん」

しゃくりあげていた聡子ちゃんは、ぽったり泣くのを止めて一直線に改札に向かった。

……嘘泣き？

思わず疑惑が胸に渦巻く。

でも、涙も出てて、目腫れてたし……。

「由美ちゃーん！　はやくはやくー」

けろっとした様子で聡子ちゃんは手を振っている。
周りの視線を痛いほど浴びながら、わたしは急いで改札に定期をかざした。

地下鉄を降りて、駅から歩いて数分。
アパートに着くと、前に白いワゴン車が停まっていた。
エレベータのほうから金属の擦れあう音が聞こえてくる。どうやら修理の人みたいだ。

「エレベータ、直るのいつだっけ？　」

「明日には使えるようになる、はず」

すっかり目の腫れがひいた聡子ちゃんの問いに、素っ気無い返事をする。

階段を上って、玄関の鍵を開けて。
今日も排水パイプがカタカタいっている。

「はい、どうぞ」

「おじゃましまーす」

勢いよく靴を脱ぎ、聡子ちゃんが家の中へ入っていく。
後ろで靴を並べ、わたしも中へ入った。

その後はまた夕食を作って、二人で食べて。

かわりばんこにお風呂に入って。

今日は何も起こらない。

わたしが、気にしすぎなんだろうか。

「わーパンダかわいいー」

テレビを見ながら笑い声を上げる聡子ちゃんを、布団に寝転び横目で盗み見る。

時計の針は十一時を差している。

……そろそろ、眠いな。

枕元の目覚まし時計から教科書に眼を戻し、枕に顔をうずめる。

聡子ちゃんはずっとテレビを見ていて、眠る気配をちっとも見せない。

バラエティ番組が終わり、夜のニュース番組が始まった。あのニュースが流れている。

被害者の子は、何も所持していない上に顔が削られていたため、まだ身元がわからないようだ。

どうやら、握っていたファイルの破片で大学生だと判ったらしい。

テロップに流れたのは、わたし達が通う大学の名だった。

「……」

さっきまではしゃいでいた聡子ちゃんは、急に無口になっている。

俯いたかと思うと、無言でチャンネルを変えた。

彼女が言うことが本当だとすれば、無理もないだろう。
近所の、それも同じ大学に通う女の子。
その子がこんな気持ち悪い事件に巻き込まれて、死んでしまうなんて。

掛ける言葉が見つからずに沈黙する。
青白いテレビの光に照らされた聡子ちゃんの顔は、目の下にうっすらとクマができていた。

「聡子ちゃん、寝ないの？　」

尋ねるわたしに、聡子ちゃんは小さく首を横に振る。

「……先、寝るね」

南の部屋の電気を消して、ふすまを閉じる。
閉まる寸前に見えた聡子ちゃんの背中は、なんだか妙に丸まっていた。

目が覚めたのは、息苦しかったから。

「……？　」

苦しくなって開いた両目に映ったのは、灰色の壁と畳だった。
金縛りだ。

生まれて初めての体験に、わたしの体はますます強張った。
目以外、動かせない。
寝相が悪かったのか、視界の端には押入れが映っている。
そこから伸びる白い線を見て、わたしは目をみはった。
塩の筋が、星明かりを浴びてきらきらと輝いている。
どうして、また。
目をぐるぐると動かして、わたしは必死にふすまを見ようとした。
聡子ちゃんがやったんだろうか？　何のために？
けれどどんなに頑張っても、真後ろにあるふすまを見ることはできない。
嫌な汗がいっぱい出て、息が苦しい。
小さな音がする。どこから？
塩の線を追って、わたしの視線が押入れに吸い込まれていく。
ぴったり閉めたはずの押入れが、指一本分だけ開いていた。
カタカタ、カタカタ。
カタカタ、カタカタ。
押入れが揺れている。
「……！　……！」

叫ぼうとしたけど、声にならなかった。
ただ引き攣った音が喉からひゅうひゅうと漏れるだけ。
苦しい。

息が吸えなくて目を見開くわたしの首に、誰かの手が触れた。

「――由美ちゃん」

ひやりとした指先が、わたしの首筋を撫で上げる。
この声は聡子ちゃんだ。でもどうして？

わたしが混乱しているうちに、冷たい手が体の向きを変えた。
ぐったりした頭がひっぱられ、視界に天井が映る。
そして、聡子ちゃんの姿も。

「……」

暗がりの中、聡子ちゃんの顔はよく見えなかった。
無言でわたしを見下ろしている。
その姿はどうにも生気を感じられない。

……何を考えているの、わたしは。

激しく脈打つ心臓に、自分自身をなだめる。
きっと、わたしが金縛りにあってることに気付いて、なんとかしようとしてくれてるんだ。
だってほら、手を伸ばして……。

わたしの両脇に、聡子ちゃんの細い手が伸びる。
ふとんが押さえられ、余計に息苦しくなった。

「由美ちゃん」

聡子ちゃんがまた、わたしの名前を呼んだ。
なんか変だ。
どう考えても様子がおかしい。

わたしの上に、聡子ちゃんの足が乗る。まるで馬乗り。

その間も、押入れの音は止まらない。

カタカタ、カタカタ。
カタカタ、カタカタ。

「ふふふ……由美ちゃん……あのね」

聡子ちゃんの手が、わたしの両頬を覆う。
じゃり、と、音がした。塩だ。

じっとりとした嫌な汗が体中から噴き出す。

そのまま、聡子ちゃんはわたしの頭を持ち上げた。
ますます息が苦しくなる。

ひゅうひゅうと息吐くわたしに、聡子ちゃんが顔を近づける。
ゆっくりと、でも止まることなく。
前髪が触れ合ってもまだ近付いてくる。
鼻と鼻が触れた。

覗きこんだ聡子ちゃんの目は、笑いの形をしているただの穴だっ

た。

「……！」

どくん、と心臓が鳴り、呼吸ができるようになる。金縛りが解けた？

「由美ちゃん……」

わたしの名前を囁いて、聡子ちゃんが唇を近付けてくる。

薄紅色の唇からのぞく、赤黒い舌。

「い、いやっ――！」

来ないで、と言いかけたわたしの顔に、聡子ちゃんの唇が触れた。

ぞわり、と背の毛が総立ちになる。

薄紅色の唇は、氷のように冷たかった。

ただ、赤黒い舌だけが炎のように熱く。

わたしの頬を舐め上げていく。

「――っ！　――っ！」

溢れる涙の筋を辿り、聡子ちゃんの舌がわたしの眼球を舐めた。

必死で抵抗しているのに、全然動けない。

押入れから聞こえる音が、いっそう大きく聞こえる。

ぬるぬると熱い舌が右目を嬲り、そして離れた。
歪んだ視界に、糸引く舌を口に仕舞う様子が映る。
「由美ちゃん、約束だよ……」
震えるわたしの喉に爪を立て、聡子ちゃんが囁いた。
「……おしいれの――」
カタカタ、カタカタ。
「……だめだよ……？　」
カタカタ、カタカタ。
自分が震えているのか、押入れが揺れているのか。
もうわからなくなっていた。
ただただ、目の前の恐怖に打ち震えて。
灰色の世界に、閉じ込められていた。

人のつながり

意識が遠のいてから、どれくらい経っただろう。

気が付いたら、朝の光に照らされていた。雀の囀(さえず)る音が聞こえる。
あまりにも静かな部屋の中で、わたしは茫然と天井を見詰めた。
蛍光灯の傘が、わずかに揺れている。

「……夢、だったの……？」

だとしたらひどい夢、そう思って上半身を起こした。
居間へ続くふすまが開け放たれている。
ローテーブルの近くに、聡子ちゃんのボストンバッグが放り出されていた。
聡子ちゃんの姿は、ない。
また、先に出かけたんだろうか。

布団の上であぐらをかくと、右目をこする。
あんな夢を見たあとだからか、妙にまぶたがむくんで、見づらい。

「……？」

右目をこすった手の甲を見て、わたしは目を見開いた。
血が、ついてる。

「まさか――」

あわてて洗面台の前へ走り、顔を確認する。
無機質な鏡の向こうには、生々しい傷を負ったわたしが居た。

右目から顎にかけて、細かい擦り傷がたくさんある。

どうして。

背筋に悪寒が走り、思わず体を両腕でぎゅっと抱きしめる。
悪夢のような戯事は、現実だった。
傷に塗りこむように付着した塩が、ぽろぽろと顔から落ちる。

彼女は、いったい何者なの？

冷や汗が首筋を伝う。

目覚まし時計のアラームが鳴って、わたしは我に返った。

「学校……行かなきゃ」

染みる擦り傷に触れないように顔を洗う。
救急箱から包帯を取り出して巻いてみたけど、上手くできなくてミイラみたいになった。

この格好で大学に行くのは気が重い。

けれど、家に居るのも怖かった。

床に座り込んで途方に暮れる。
こんなこと、誰に相談したらいいんだろう？

「……お父さん」

携帯電話で実家にかけてみるけど、誰も出ない。

そう今は一日で一番忙しいとき。お父さんもお母さんも電話に出れない。

八コール目に呼び出しが切れて、わたしの中の何かも切れた。
噛み締めた唇から嗚咽(おえつ)が漏れて、顔に巻いた包帯を涙がぬらす。

「やだよ、やだよ――。どうして誰も電話に出ないの」

涙が頬の傷に染みて、余計に悲しくなって。
そのまま泣きじゃくりそうになった。
頭の中に晴香の言葉がよみがえるまでは。

――もし、一人でなんともできなくなったら、いつでも電話してきていーよ。

カタカタ震える指で携帯電話のボタンを押す。
アドレス帳の中の、晴香の名前。

「お願い、出て――」

祈るように呟くわたしの耳に、聞きなれた声が携帯電話を通して聞こえた。

『もしもし、由美？　どーしたのこんな朝早くに』

あくびの音が聞こえ、雑踏の音も聞こえる。
もう家を出ているみたいだ。

「晴香、あのね、……」

口を開いたけれど、何と言ったらいいかわからない。
昨日のあれは、本当にあったことなのか。
聡子ちゃんは、本当に聡子ちゃんなのか。

黙りこむわたしに、晴香は携帯電話の向こうで声のトーンを落とした。

『……何かあった？　ちょっと待ってね、静かなとこ行くから』

「うん――」

雑踏の音が遠のき、衣擦れの音が聞こえた。どこかの壁にもたれかかったらしい。

『おっけー。で、どうしたの？　』

「……助けて、晴香――」

悩んだ末、口に出せたのはそれだけだった。
自分自身でも、うまく話をまとめられない。
だけど、たったそれだけで晴香は察したようだった。
重苦しい沈黙が続いている。

『由美、大学来れる？　詳しく話を聞かせて』

「顔に怪我しちゃって――人前には出たくないの。……でも、家に居るのも怖いし」

『家でなんか嫌なことが起こったんだね。待ってて、今から迎えにいく。わたしの家で話そう』

うん、と答える。
地下鉄乗るから電話切るね、と言って、通話が終わった。
それから数十分間、心細い気持ちで晴香を待ち続けた。
インターホンの音とともに晴香がやってきて、玄関扉を開ける。
わたしの姿を見て、晴香は一瞬ひるんだみたいだった。
「う、うわ……。由美、だいじょうぶ？　」
うなづくわたしに、晴香は険しい顔で家の中を覗きこんだ。
「ごめん、凹んでるとこ悪いんだけどきいてもいい？　もしかして彼氏に殴られたりとかした？　」
「まさか。そもそも彼氏まだいないよ」
「じゃあ、あのバッグ誰の？　」
やっぱり晴香は鋭い。
あのボストンバッグが聡子ちゃんのものだと話すべきか否か、わたしはまだ迷っていた。
沈黙するわたしを見て、晴香は深入りせず扉から身を引く。
「おーけーわかった。誰にでも秘密のひとつや二つあるよね」
「――ごめん」

頭を下げると、結ぶのがゆるかったのか、包帯の端がほどけた。
細かな擦り傷だらけの右顔面を見て、晴香の表情が固まる。

「ゆ、由美――それ――」

わたしを指す手が震えている。もう隠し切れない。
目を伏せると、わたしは口を開いた。

「話したいことって、これなの。二日前から一緒に暮らしてる人がいるんだけど、その人の様子がおかしいの」

「おかしいって――具体的にどんな感じよ？」

「……金縛りにあってるときに襲ってきたり、塩を部屋に撒いたり。目があったり、なかったり」

わたしの言葉に、晴香はボブカットの頭を抑えて後退りした。

「な、なんかオカルトチック。一応、相手は人間なんだよね？」

「昼間は普通にしてるみたい。友達もたくさんいるし」

友達、と晴香が繰り返し、呆れ果てた表情をしている。
……晴香、信じてくれないのかな。

知らず知らず解けた包帯を握る手に力が入る。
友達に信じてもらえなかったら。
本当に一人ぼっちになってしまう。

見捨てないで、そう言いかける寸前。

晴香が決意した顔で携帯電話を取り出した。

「……電話？」

「うん。晃（ひかる）に。あの子、確かこーいうことに詳しかったはず」

晃。その名前を聞いて、わたしも思い出した。

長い黒髪の女の子。最初はちゃんと講義に出ていたけれど、段々と姿を見せなくなった。

たまにメールを送るんだけど、返事がまともだったためしがない。

そんな子が電話に出るだろうか。

疑い半分で見詰めていると、晴香の顔が明るくなった。

二言三言交わして、晴香が携帯電話を閉じる。

「来てくれるって。わたしの家に直で行くみたいだから、わたし達も急ごう」

「う、うん」

急いで包帯を巻きなおし、晴香と一緒にエレベータへ向かう。

ボタンを押して待つわたし達の横で、排水パイプがカタカタと揺れていた。

風も、ないのに。

気が付いて、おもわず握り締めた家の鍵が、冷たく肌に食い込んだ。

昼間の会議

晴香の影に隠れるように、街中を移動して。
気が付くと、晴香の家に着いていた。

傷だらけの顔をみられたくなくて、俯いていたから。
道中の記憶は全くない。

「ただいまーって、晃、もう来てるんだ」

鍵のかかってない引き戸を開けて、晴香が呟く。
土間のような広い玄関に、和と相容れないゴスロリな靴が一足。

メールの遣り取り以上に奇妙な事態が起こりそうだ。
黒革にフリルだらけの厚底ブーツを見詰め、内心そうこぼした。

廊下の奥から、晴香のお母さんがエプロンをつけたまま出てくる。

「おかえりなさい、お友達来てるわよ。大学サボるのもほどほどにね。……あら、由美ちゃん。怪我したの？」

「……こんにちは、お邪魔します」

おろおろする晴香のお母さんに頭を下げて。
何も言えない、言いたくないわたしのかわりに、晴香が適当に誤魔化してくれた。

「――ってわけで、わたしたちこれから大事な話があるから。勝手に部屋入ってこないでよー？」

「はいはい。飲み物とお菓子用意するから、呼んだら取りに来なさいね」

めんどくさいなー、と晴香が頬を膨らませる。
晴香のお母さんはにこにこ笑っている。

ふっと、実家にいるお母さんのことが恋しくなった。
アパートなんか借りずに、実家から大学に通えばよかった。
そうすれば、こんな気味の悪い目にあわずにすんだかもしれない。

日常のなんのことはない幸せな風景を見て。
わたしの心はすこし荒(すさ)んだ。

「あ、スリッパ好きなの履いていいよ。わたしの部屋覚えてる？」

「二階の、階段に一番近い和室だよね」

「そそ。晃待ってるみたいだから、先行ってて。わたしジュース運ぶから」

頷いて、階段をのぼる。
古い板張りの階段は、わたしの体重にきしんで悲鳴を上げた。
レトロな木のてすりを掴んで、二階を見上げる。
ぴったりと閉められたふすまの間から、オレンジ色の光がゆらゆらと見えた。

「……晃、いるの？」

揺れる光に昨日の恐怖を思い出し、おっかなびっくり尋ねる。

「その声、由美だな。入りたまえ」

「……」

晃は中にいるらしい。

メールでさえ奇妙と思った遣り取りは、細い女の子の声を通すとますます奇妙だった。

ふすまに手をかけてそっと開く。

隙間から覗きこんだ先には、西洋風の病んだ衣装を着た女の子が座っていた。

晃だ。

黒い長い髪を白いレースのリボンで高く結い上げ、蝋燭を片手に座っている。

「何してるの？　」

「そちが体験した怪異を聞くため、雰囲気をつくっているのだ」

表情乏しい顔で晃がのたまう。

電気をつけない部屋は、薄暗く不気味だった。

晴香の部屋は隣のビルのせいで、日光がはいらないから。

「突っ立ってないで、座ったらどうだ。そこに座布団があるぞ」

ほれ、と、晃の指が下座の座布団を指す。

晃自身は上座にいるのに。

つぎはぎだらけの座布団に腰を下ろすと、晴香が階段をのぼる音

がした。
「お待たせー……って、暗いなぁこの部屋。電気つけよーよ」
「そのままにしてくれ」
ひもをひっぱろうとする晴香を、晃が制止した。
晴香は怪訝な顔で卓袱台（ちゃぶだい）に飲み物を置く。
「――あ、由美。そっち座っちゃったんだ？　」
「うん。だめ？　」
「だめじゃないけど、それわたしの普段使いだから、きったないよー。こっちのお客さん用のどうぞ」
真新しい座布団を持ち上げる晴香。
それを、また晃が制止する。
「それも、そのままで」
晃の言葉に、晴香は銀縁メガネの奥から不思議そうな視線を向けている。
しぶしぶ、晴香は新しい座布団の上に腰を下ろした。
蝋燭の火が揺れる。
「では話したまえ。その怪異とやらを」
もったいぶった口調で急かされ、わたしは口を開いた。

わたしが語るここ三日の出来事を、晃は分厚い手帳にメモする。
全てを話し終えると、晃は手帳に目を通した。

「……ふむ」

手帳を覗き込む顔に、揺れる炎が妙な陰影を描く。

「……どお？　なんかいいアドバイスとかある？　」

真剣な表情で、晴香が晃に詰め寄った。
まるで自分のことのように考えてくれる晴香の存在が、嬉しくてすこし恥ずかしい。

晃はというと、無表情だった顔を歪めている。

「なんともならんなぁ。さっぱりだ」

急に軽い声になって、天井を仰いで溜息をついた。

それって、と、口を挟もうとする晴香を遮り、晃が続ける。

「家に泊める許可を出してしまったのがなぁ。帰れと言っても、約束を盾にして帰らんだろう」

たしかに、最初の日に約束してしまった。
聡子ちゃんの持つ雰囲気に流されて。

自己嫌悪で落ち込むわたしの横で、晴香がしつこく食い下がっている。

「何がダメなのか、詳しく教えてよー。ひょっとしたら、解決する方法があるかも……」

「家というのは、一種の結界みたいなものだ。ウチとソトの概念。そこには曖昧だがはっきりとした線引きがあり、そうであるものと、そうでないものとを分けている。その境界から生まれる緊張はプライバシーの問題の発端でもあり、古今東西争いの種でもあり――」

「おーい？　晃、どこ見て喋ってるのー？　」

虚ろな目をして呟き始めた晃の肩を、晴香が揺すっている。
おっとすまない、と、晃が謝った。
頭を下げるのと一緒に、膝に抱えていた可愛いバッグから箱を取り出す。
人形の入った箱だ。

「うわ、そーいうの持ち歩いてるんだ……」

若干引き気味の晴香を気にせず、晃は冷えたコップに手を伸ばした。
オレンジジュースが、ちゃぷちゃぷと音を立てて揺れる。

「まぁ、見ていたまえ」

眉ひとつ動かさずに、晃はコップと箱を畳の上に置いた。
そしてバッグの中から、ハンドタオルを取り出す。黒いレースが悪趣味だ。

「まず、仮定。この液体が、由美の言う怪異だとする。箱が家、人形が由美だ」

「う、うん」

凝視するわたしたちの前で、コップが傾けられる。
オレンジジュースが、プラスチックの箱にかかる。

「家が怪異に対して閉じられていたら、怪異は入ってこれない」

ハンドタオルでジュースを拭(ぬぐ)い、淡々と続ける。
スライド式の蓋を開き、その上でコップを傾ける。

「あっ」

人形を心配するも虚しく、オレンジジュースがこぼれた。

「開かれていると、こうなる」

べたべたになった人形をつまみ、持ち上げる。
小さな服から、ジュースが滴り落ちた。

「で、でもさぁ。それならまた結界を張ればいいんじゃない？」

人形から眼を逸らしながら、晴香が提案する。
晃の青白い頬に、えくぼができた。
忍び笑いが聞こえる。

「そうだな。怪異に汚された家と、自分をしっかりと清めて、怪異に嗅ぎ付けられぬようにできれば」

そうすれば、わたしは聡子ちゃんから解放されるのだろうか。

「徹底的にやらなければ意味がない。できるか？　また例えだが、この人形と箱に染みたオレンジの匂いを全て消すようなものだぞ？　他の香りで誤魔化そうとしてもだめだ。完全無臭、全く元通りにできるか？　」

にやにやと笑いながら、晃は挑発的な言葉を投げ掛けてくる。

つられて晴香もこっちに眼を向けた。

二人に見詰められて、膝の上で握った両手が固くなる。

「やって、みる……」

「そんな弱気ではだめだ。実行する、と言いたまえ。話を聞いて感じたが、どうも由美はクールというより意志薄弱なだけだな。そこに漬け込まれていることを、薄々感付いているだろう？　」

全て見透かしているように、晃はわたしを見下ろす。

……確かに、そうだ。

あの昼下がりの教室で、聡子ちゃんと話してから、なんだか変だ。

そう、三日前から。

「……」

本当に、三日前から？

頭の中に霞（かすみ）がかかる。

今、何か思い出しかけたような。

沈黙するわたしに、晴香が声をかけた。

「大丈夫？　由美。わたしも協力するから。今すぐにでも、その変な人に出てってもらおうよ」

その変な人は、晴香の友達の聡子ちゃんなのだ。
素直に喜べず、泣き笑いのような表情でうなづいた。

やりとりをじっと見ていた晃が、気味の悪い笑みを浮かべている。
バッグからまた何か取り出した。
晃が持っている手帳と、まったく同じものだった。

「決意ができたなら、もって行くといい。今まで趣味で調べたものの写しだ」

「――ありがとう」

手帳を受け取り、眺める。
大きな蛾の模様。
擬似の目玉が、わたしを見詰めている。

「それでは、わたしはこれで。家まで送ろうか、由美？」

レースをひきずり、晃が立ち上がった。
手帳を抱えたまま、沈黙するわたし。

二人に話を聞いてもらっても、まだ不安だった。
安定することのない感情の波が、寄せては返し。
心がざわめく。

「由美、よかったら今日泊まってく？」

晴香の明るい声で、現実に引き戻された。

「い、いいの？　」

尋ね返しながら、安堵している自分がいる。
ふすまに手を掛けた晃が、その様子をじっと眺める。

「うん。ウチ布団なら腐るほどあるし。寝巻きも、わたしのでよければ。よかったら下着も貸すよー」

ただし紐パンだけどね、と見栄っ張りな冗談を言う。
ぺろっと舌を出しておどける晴香に、わたしもつられて笑った。

「じゃー決まりね。あ、晃、今日はありがとう。今度なんか美味しいものでもご馳走するよ」

晃は真黒な瞳で静かにこっちを見下ろしている。
晴香を手招きで呼んで、晃はふすまを閉めた。
薄い境界の向こうから、二人の声が聞こえる。

「なに？　食べ物じゃ不満？　」

「いくつか忠告がある。由美に使わせるのは、全部晴香の普段使いのものにするのだ。それと、由美が帰ったらそれらは全て捨てるように。風呂に入って、塩で体を洗うのも忘れるな。念入りにな。最後に、部屋で自分の好きな香りのアロマオイルを焚いておきたまえ」

「……なに、それ。感じ悪い」

「由美は助からんよ」
冷たい一言に、どき、と胸が鳴った。
手帳を握る手が汗ばむ。
助からない？
わたしが？
それってどういうこと？
ぐるぐると疑問が頭の中で渦巻く。
ふすまの向こうでは、晴香があからさまに不機嫌な声を出していた。
「ちょっと、やめてよ――友達でしょ？　そんなひどいこと」
「友達だから言っているのだ」
抑揚のない晃の声に、残酷な笑いの色が滲んでいる。
きっと、あの青白い顔に薄気味悪いえくぼができているんだろう。
「……もう、いい。またね」
「わたしは忠告したぞ。さよならだ」
木の階段が軋む音が遠ざかり、引き戸の音が聞こえた。
ふすまが開き、晴香の顔がのぞく。
「じゃ、お客さん用の布団もってくるね！　」

無理矢理明るい声を出している。
晴香は晃の忠告に従わないみたいだ。

わたしは、どうする？

胸に抱えた手帳に眼を落とし、唇を噛む。
消えかかった蝋燭の炎に照らされて、部屋の奥のおしいれが揺れた気がした。

カタカタ、カタカタ、と。

かべのしみ

晴香の家に泊めてもらって、他愛ない話をして過ごした。
布団は、無理言って晴香のものを貸してもらった。

「電気消すね」

晴香がそう言って、蛍光灯の紐を引っ張る。
ぷつん、と音がして、星明りだけになった。
その日の夜は、よく眠れたと思う。

携帯電話の着信音で、目が覚めた。

「……だれからだろ？　」

枕元で光る携帯電話を開く。
一瞬はやく、着信音は途絶えた。
待ち受け画面には、新着メールと不在通知のアイコン。

「うわ……」

アイコンを選択して、その数を見て。
わたしは息を呑んだ。

不在通知は二桁、新着メールに至っては三桁を超えている。
あまり知人と交流しないわたしにとって、異常な数字だった。

そしてそれら全てが、同じ人の名前で埋め尽くされている。

聡子ちゃんだ。

「……気持ち悪いなぁ、もう」

留守電を聞く気になれなくて、とりあえず最新のメールを開いた。

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・』

全部文字化けしていた。

「――？　変なの」

続けて、新しい順にメールを開く。

文字化けばかりの文面が、いくつもいくつも続いていた。

あまりの異様さに、背筋が寒くなる。

時間を過去に辿るほど、文字化けの量は少なくなっていった。

『・・・うわ・・・ら・・・まし・・・・・』

『・・・ゃん・ない・ら、・の・・けち・った・』

『鍵・・・てて、・入・な・』

『・美ちゃ・いつ帰って・るの・』

『今出かけて・のかな？　家の前で・って・ね』
『帰ってきたよー。鍵・けてほしいな』
『今日どうしたの？　講義来てなかったよね？　』
一番最初のメール。
その白々しい文面に、わたしは思わずむっとした。
誰のせいで、こんなことになったのか。
怪我することになったのか。
ふつふつと腹の底からわく怒り。
携帯電話を握る手に力が入ったそのとき。
晴香が眠そうに起き上がった。
「んー、まだ五時じゃん。由美って以外に早起きだね」
腫れぼったい目を擦り、銀縁メガネを掛ける。
二度寝しようか決めあぐねている晴香。
その横で、わたしは携帯電話を閉じた。
「ごめん、家に帰らなくちゃ」
「え？　」
寝ぼけていた晴香の顔が、急にしゃきっとした。
「由美の家にいるんだね？　変な人」

「う、うん……」
寝起きとは思えない鋭い推量。
それにうなづくと、晴香はいそいそと着替え始めた。
「わたしも行く」
「え、だ、だめだよ」
「なんで？　その人が由美に怪我させたんでしょ？　一人で行ったら危ないよ」
「でも、晴香まで怪我したら――」
言葉をにごしていると、階下から晴香のお母さんの声が聞こえた。
「晴香、起きてるのー？　だったら朝ごはん作るの手伝ってちょうだい」
呼ばれた晴香は、行こうか迷っている。
その間に手早く着替えて荷物をまとめ、わたしは立ち上がった。
「あ、由美」
「泊めてくれて、ありがと。気分も落ち着いたみたい。だから――帰るね」
やっぱりついて行く、と晴香が言いかけたのを遮って。

「最後にお願いがあるんだけど、この布団……」
今度はわたしが遮られた。
「由美、もしかして昨日晃が言ってたの聞こえてた？　気にしなくてもいいのに」
わたしたち友達なんだから、と晴香が言う。
くすぐったい言葉に、わたしの頬がほころんだ。
「うん。……だから、かも。大丈夫、何かあったらまた電話するから」
晴香は不満そうな表情のまま、わたしを見詰めた。
もう一度、晴香のお母さんの声がする。
渋々着替えだす晴香にさよならを言うと、わたしは外へ出た。

アパートの階段をのぼって、家の前に着いて。
鍵を差し込んで回したとき、気付いた。
「……開いてる」
家の鍵は、わたしと大家さん以外持ってないはずなのに。
冷たいドアノブを握ると、玄関扉を開ける。
背後で排水パイプがカタカタと鳴っていた。
「……」

電気のついてない家に、わたしは眼を走らせた。
聡子ちゃんのボストンバッグが、昨日出ていくときに見た位置から移動している。

「……聡子ちゃん、いるの？」

声をかけてみたけど、返事は無い。
耳が痛むほど静かな部屋のなかで、小さなもの音がした。

カタカタ、カタカタ。

「――！」

ほんの小さな物音なのに、全身が引き攣る。

どこから、聞こえてくるのだろう。

息を殺して耳を澄ます。

「まさか……」

北側の部屋から、音がする。
物置状態の、開かずの部屋。
中に何が？

ひんやりしたドアノブを握り、思い切って開く。
うすく埃の積もったフローリングに、足跡がついている。
辿った先に、細い足。

「あ、由美ちゃん。おかえり」

聡子ちゃんが、体育座りでこっちを見ていた。

その顔に、微笑みを浮かべて。

三日前は綺麗だと思った笑顔も、今は不気味なだけだった。

「昨日はどこに行ってたの？　ずーっと待ってたんだよ」

「聡子、ちゃん……。どうやって家の中へ……？　」

質問を質問で返すと、聡子ちゃんは口端を吊り上げた。

「大家さんに頼んで開けてもらったんだ。ちゃんと学生証見せて、由美ちゃんの友達だって言ったよ？　女の子が夜うろついてるのは危ないからって、すぐ鍵開けてもらえた。十一時くらいだったかな」

「そ、そう……」

聡子ちゃんは、にこにこと微笑んでいる。

その言葉に怪しいところは何もない。

深くきくことはできなかった。

朝の静かな家の中に、目覚まし時計のアラーム音が響く。

弾かれたように、聡子ちゃんが立ち上がった。

「あ、もう時間だ。サークルのミーティングに遅れちゃう」

ごく当たり前の言葉を喋って、ごく当たり前に鞄を肩にかけて。

それが普通のことなのに。
どうも妙な雰囲気だ。
……すこし、わざとらしい気がする。
「聡子ちゃん、ごはん食べた？　」
尋ねるわたしに、聡子ちゃんはうなづき返した。
その顔は、こころなしかやつれて見える。
家の中に、料理をしたような匂いはなかった。
「じゃ、また帰りにね」
さらさらと髪をなびかせて、聡子ちゃんは家を出て行った。
後に残ったのは、奇妙な懐疑の心だけ。
「……なんで、使ってない部屋に勝手に入ってるのよ」
薄気味悪くて、ついイライラしてしまった。
部屋から出て、扉を閉めようとすると。
「――？　」
違和感を感じて、手を止めた。
何だろう、何かが変わっている気がする。
部屋の中を見回し、積まれたダンボールの陰に眼が向かう。
「え……」

壁が、変色していた。
湿気のある部屋でもないのに。
近寄って、ダンボールを退かせてみると。
そこには手の平大の染みができていた。
薄い、赤みの強い紫。
生臭い匂いが、鼻をついた。
「何これ、血――？」
ぞっとして体を引くわたしの耳に、またあの音が聞こえる。
小さな小さな、不快な音。
カタカタ、カタカタ。
カタカタ、カタカタ。
音と共に、染みが広がっていく。
「いや――」
後退りするわたしの腕に、鞄から落ちた手帳が触れた。
晃がくれた手帳だ。
そうだ、もう黙って怯えているわけにはいかない。
家鳴りのような音と、広がる染み。
染みを睨み、わたしは決意した。

もう聡子ちゃんの好きにはさせない。

晃の予言したとおりになるつもりもない。

だから、絶対、聡子ちゃんを追い出してみせる。

強気になったのは、久しぶりだった。

わたしの目の前で、染みは広がり続ける。

固く心に誓ったその言葉を嘲笑うように。

なり続ける音の中、小さな変化だった。

線の意味

いつもと反対方向の地下鉄に乗って。
郊外の大きなショッピングセンターで、わたしはあるものを買いあさっていた。

晃からもらった手帳には、いろいろなことが書いてあった。
……でも、どれも眉唾もの。
手帳の最後には、おそらくわたしに向けられた一文が添えてあった。

『こんなものに頼るぐらいなら、自分で解決法を調べたまえ。君の頭は何が入っている？　君の家にある箱は何に使うもの？　』

箱というのは多分、パソコンのことだろう。
前にわたしのパソコンがウィルス感染したとき、相談したのを覚えていたんだ。

メモの通りパソコンで調べてみたけど、出てくるサイトはどれも怪しいものばかり。
――結局、自分で何とかするしかなさそうだ。

有効そうな対策をいくつか手帳にメモして。
かさぶたになった怪我にファンデーションを塗りたくり。

これで準備万全だ。

こうして、わたしは必要なものを買うために遠くのショッピング

センターまで足を運んだ。

「これと、これと、……それとあれも」

ひとつひとつ商品を確認しながら、買い物籠の中へ入れる。
ニンニク、榊、アルコール度数の高いお酒。
幾何学的な模様のテーブルクロス。
朱色の絵の具。

これで全て揃った。

思わずほころぶ顔を見て、店員さんは不思議そうな顔でレジを打っている。
エスカレータ横の柱時計は、もう午後三時を示していた。

あとは、家に帰って準備をするだけ。

追加で買った二？の塩の袋を抱いて、わたしはほくそ笑んだ。

家に帰って、全ての仕度を整えて。
ローテーブルの前に座ってテレビを見ていると、七時のニュースが始まった。
ここ数日のニュースやワイドショーは、あの残酷な事件のことで持ちきりだ。

けれどどんなにマスコミが騒ごうとも、事件は少しの進展も見せなかった。

立ち入り禁止の黄色いテープが張られたアスファルトを、テレビカメラが映している。

事件のあらましをカメラ前のキャスターが読み上げ、何の意味もない中継は終わった。

「……」

新しく張り替えたテーブルクロスに肘を突き、ぼーっとテレビを眺める。

インターホンの音が聞こえた。

「はーい」

立ち上がるよりもはやく、玄関扉の鍵が開く。

「ただいまー。へへ、合鍵作っちゃった」

聡子ちゃんが、にこにこしながら勝手に上がってきた。

非常識な告白に、眉根が寄る。

その耳に、聞きなれた名前が入った。

『――るさん十八歳のものと思われる鞄と血痕が見つかり、周辺の捜索を続けています』

「えっ？　」

振り返って画面に喰らいついたけれど、もう次のニュースに移っ

ていた。

「今……晃って言った？　」

嫌な予感がして一人呟くわたし。

背後で、聡子ちゃんが近付く足音がする。

「晃って、もしかして斉藤晃ちゃん？　うちの近所から大学通ってる――」

そう、その晃だ。でも、まさか――。

ほんの十数時間前は三人で話していたのに。

沈黙するわたしの横に、聡子ちゃんが腰を下ろす。

「わー、今日の料理すごく凝ってるね。おいしそう」

こんなに気合いれちゃってどうしたの？　と尋ねる聡子ちゃん。

それを横目で見て、わたしは隠し持つ手帳を握りしめた。

気合を入れるも何も、これは全て聡子ちゃんのために作ったものだ。

彼女を、追い出すための。

古今東西様々な怪異が嫌う食べ物満載のメニュー。

一品づつに、すぐそれとわかるように混ぜ込んである。

「おいしー！　やっぱり由美ちゃんのところに泊まりにきて正解だったー」

なのに、聡子ちゃんは料理を全て平らげてしまった。

「……そ、そう」

「あ、テーブルクロス変えたね。わたしこーいう柄好きなんだ」

幾何学模様のテーブルクロスを指し、聡子ちゃんが言う。

その手首には、十字架のブレスレット。

彼女は西洋系の怪異ではないようだ。

作っているような明るい態度に嫌気が差して、次の手段に移る。

「聡子ちゃん、おまじないって好き？　」

尋ねるわたしに、聡子ちゃんは首を傾げる。

「好き、だけど……。由美ちゃんも好きなの？　てっきり、そういうことに興味ないタイプだと思ってた」

「今日面白いおまじない教えてもらったから。あのね、例えばこんな紙に名前を書いて――」

買い物袋から色々な言葉が書いてある紙を取り出し、ボールペンで字を書く。

聡子ちゃんもやってみる？　と尋ねると、何の警戒も無く同じようにした。

……変化は見られない。

「ね、これ何のおまじない？　わたしね、バイト先の先輩に告白するつもりなんだ。恋愛のおまじない教えてほしいなー」

何も知らずににこにこと、聡子ちゃんは名前を書いた紙を振っている。

デザートのパンナコッタに混ぜたお酒に酔ったのか、聡子ちゃんの頬はほんのり桜色だ。

八時半を指す時計を見て、無理矢理話題を変えてみる。

「……また今度ね。それより、お風呂もういれてあるよ」

「ほんと？　なんかちょっと汗かいてきちゃったから、先お湯もらうね」

ふらふらと千鳥足になりながら、聡子ちゃんは風呂場へ向かった。

唯一効果が出ているのはお酒だけど、果たして――。

聡子ちゃんが本当に人じゃない何かなのか、単にお酒に弱いだけなのか。

どうにも判断つきかねる。

風呂場からは、下手な鼻歌が聞こえてくる。

榊を飾ったのも、聖別した精製油のお風呂も、効いてないみたいだ。

「……」

聡子ちゃんがお風呂に夢中なのを確認して、わたしは北側の部屋

に向かった。

ドアを開けた向こうには、朝よりさらに広がった壁の染みが。
そして小さな物音が。

カタカタ、カタカタ。
カタカタ、カタカタ。

「――っ」

気付くと、壁を拳で叩いていた。
手の痛みに気付いてはっとする。
その耳に、大きな物音が聞こえた。

「え？　」

ガタン、という音。

思わず身を竦(すく)めるわたしの耳に、お風呂場が開く音が聞こえる。

「大丈夫？　今の音何？　」

タオルも巻かずに、聡子ちゃんがお風呂場から走り出てきた。

「何も……。ちょっと部屋の片付けしようかと思って」

弁解するわたしの前で、聡子ちゃんは細い首を傾げている。
その足元に、水溜りがどんどん広がっていく。

眉間にシワが寄っていたのか、わたしの顔を見た聡子ちゃんは慌

てタオルを取りに戻った。
下着もつけずに水溜りを拭く聡子ちゃん。
その無頓着で無防備な姿が気味悪くて、わたしは逃げるように北側の部屋から出た。

「……わたしもお風呂入るね」

「うん、わかったー。床濡らしちゃってごめんね」

一直線にお風呂場へ向かう耳に、すこし物音が聞こえた。
多分、聡子ちゃんが何かを動かしてるんだろう。
あの部屋には食器とかもあるから、あんまり荷物を動かさないでほしいのに。
そう思いながら、服を脱ぎ捨ててお風呂に入る。
精製油の良い匂いが、お風呂場中に満ちていた。

ちゃぷん、とお湯に漬かり、物思いに耽る。

食べ物も、図形も、植物も香油も御札も効かなかった。
ということは、聡子ちゃんは普通の人間？

そう結論付けるしかなかった。
たとえ一昨日の出来事の説明がつかなくても。

「ちょっと頭にくるとこもあるけど、普通の子。かぁ……」

半分ほどに減ったお湯の中で足を動かし、天井を見上げる。
じわりと赤い液が染み出しているのを見つけ、肩が強張った。

「……な、なに？　」

赤くて液状のものと言ったら。
でもそうだと思いたくない。

ユニットバス特有の天井の継ぎ目から染み出る液体をみつめたまま、お湯から出る。
赤い液体は、天井についた水滴に混じってお風呂の中に滴った。

絵の具を溶かしたように、お湯の中に赤い線が細く広がっていく。

「もしかして――入る前から混ざってた？　」

ぽたぽたと垂れる雫を見詰め、一人呟いた。
すぅっと背筋が寒くなり、慌ててシャワーを浴びる。
急いで着替えて居間に戻ると、聡子ちゃんはテレビを見ていた。

「……ねぇ、聡子ちゃん。お風呂場のことなんだけど……」

体育座りでテレビを見詰める聡子ちゃんに、声をかける。
くるっと首だけこちらを向いて、眼と眼が合った。

「うん？　今日はお風呂もいい匂いしたね。もしかして誕生日だった？　わたし何かプレゼント買ったほうがよかったかな」

上気して桃色になった頬で微笑み、聡子ちゃんがそう言った。
……彼女は赤い液体に気付かなかったのだろうか？

困惑してその場に立ち尽くしていると、インターホンが鳴った。
中華飯店の人の声がする。また、部屋の番号を間違えてるのかな。

玄関扉に向かうわたしを、聡子ちゃんが追い越していった。
「あ、わたしが頼んだの。ごはん美味しかったけど、ちょっと足りなかったから――」
財布を片手に、聡子ちゃんが説明する。
確かに、晩御飯は品数が多いわりに総量は少なかった。
玄関では聡子ちゃんと店員さんが何かもめている。
「あれ？　わたしが頼んだのは肉ラーメンCセットですよ」
「えっ……しまった。すみません、隣の人に間違って渡しちゃったみたいなんで。新しく作るんで、もう三十分ぐらい時間いただけますか」
「ええー、もう待てないですよー。ていうか隣の人に渡したんなら、こっちのセットと交換してもらえば万事解決じゃありません？」
「いやもう食べ始めちゃってるかと……」
「訊いてみなきゃわかんないですよぉー。一緒に行きましょう！ね？」
どうやら店員さんが渡す品を間違えてしまったようだ。
聡子ちゃんと二人で騒ぎながら、玄関を出て行く。
閉まった扉の向こうから、今度は三人で揉める声が聞こえてきた。
野次馬根性が頭をもたげてくるけど、ぐっと我慢する。
「そうだ、布団敷こう」

煌びやかな画面を映すテレビの電源を落とし、南の和室へ向かう。

「――！」

そこで、視界に映ったのは。
またしても白い塩の線だった。

「もう、何なのよ――」

畳に膝をつき、塩の線を指で触る。ざらざらした感触が一昨日の悪夢を呼び起こし、肌が粟立った。

さっき食事をしていたときは、何もなかった。
わたしがお風呂に入っている間、あの十数分間に――。
聡子ちゃんが――。
何のために？

伸びる塩の線の先を眼が追う。
蛍光灯の光を浴びて白く輝くその行く先は。
僅かに開いた押入れへ。

「……」

耳に聞こえてくる聡子ちゃんの声が、やけに遠く感じた。
ふらふらと火に誘われる蛾のように、押入れへ近付く。

引き手に手を掛け、躊躇する。

この先に、何かがあるのだろうか？

緊張か恐怖か。
わたしの手は震えていた。
振動が引き手に伝わり、押入れのふすまを揺らす。
カタカタ、カタカタ。
塩の粒が跳ねて転がる。
「由美ちゃん、」
「……っ！」
肩を叩かれて、全身がびくんと痙攣した。
炒飯皿を片手に、聡子ちゃんが肩に触れている。
「……あ、戻ってきたんだ。ちゃんと頼んだもの受け取れたの？」
限界まで首を回して、やっと聡子ちゃんの頭が見えるぐらいの場所。
そう、ほとんど死角に、聡子ちゃんは立っていた。
足音が聞こえなかったのは、気のせい？
わたしの問い掛けに、聡子ちゃんは沈黙している。
「聡子ちゃん？」
「由美ちゃん、約束したよね」
肩に触れた聡子ちゃんの手に、力が入る。

すす……と、畳の上を一歩進む音。

「おしいれの中、見ちゃだめって言ったよね？」

ゴトン、と何かが落ちる音がした。

震える視界の端に、散らばった炒飯が見える。

おしいれの中、見ちゃだめ？

そんなこといつ言われたっけ？

混乱する間にも、聡子ちゃんの手はわたしの肩に食い込んでいく。

「い、痛い……」

「由美ちゃんはダメだなぁ、こんな簡単な約束守れないなんて」

囁くように小さな聡子ちゃんの声は、震えていた。

笑っている。

必死に笑いを堪(こら)えているんだ。

「聡子ちゃん、どうし――」

急に突き飛ばされて、言葉が途切れた。

いきなり態度を豹変させた聡子ちゃんは、薄ら笑いを浮かべている。

「由美ちゃんでしょ？　塩を片付けちゃったの。ぴったり閉めたおしいれを開けたの。だめだよ、おしいれはちゃんと閉じてないと」

にこにこと笑いながら、でも死んだような目で、聡子ちゃんが近付いてくる。
炒飯皿を拾い上げるのを見て、わたしの頭の中で警報が鳴った。
逃げなきゃ。
殺されてしまう。

「うふふ、由美ちゃん……ふふふふふ」

だけど、体が震えて力が入らない。
指一本動かせない。

じりじり近付いてくる聡子ちゃんの唇が動いているけれど、声が小さすぎて何を言っているかわからない。

「な、なんで――ここはわたしの家なのに――。押入れなんていつでも中を見てるのに――」

畳を引掻き、腕の力だけで後ろへ逃げた。
塩の線を指が掻き消し、散らせる。

後退りする背中に、押入れのふすまが当たる。
震えるわたしに合わせて、ふすまが鳴った。

カタカタ、カタカタ。

聡子ちゃんの顔から笑みが消える。

「由美ちゃんが余計なことするから――」

暗い眼がわたしを見詰めている。

空洞なんかじゃなく、生きた人間の視線。
気味の悪い舐めるような視線。
聡子ちゃんの細い手が伸びて、わたしの足首を掴んだ。
「ひっ――」
口から漏れる悲鳴に、聡子ちゃんは両目を細めて笑った。
聡子ちゃんの手が炒飯皿から離れ、足に伸びてくる。
もう片方の足首も掴まれて、ずるずると部屋の真ん中へ引き摺られた。
視界が揺れて一方向に定まらない。
「どうして、約束守れないかなぁ？　おしいれを開けちゃうのかなぁー？」
握られた足首がぎしぎしと音を立てる。痛みに悶えるわたしを見下ろし、聡子ちゃんは蛍光灯の紐に手を伸ばした。
紐が揺れている。
「ほら、来た……。由美ちゃんのせいだよ」
わたしが触れてるわけでもないのに、押入れが鳴り始めた。
どこからか、重い響きの物音も聞こえる。
まるで、出してくれと壁を叩くような音。
音が激しくなるにつれて、聡子ちゃんの様子もおかしくなってきた。
瞳孔が大きくなったり小さくなったり。

額にはうっすらと汗が滲んでいる。
笑顔の形の顔は、ぴくぴくと引き攣っていた。
「塩……もっと塩を持ってこなくちゃ……」
うわ言のように繰り返し、聡子ちゃんが台所へ向かう。
その間も音は鳴り続ける。
恐怖に打たれて動けないわたしの後ろで。
押入れの開く音が、聞こえたような気がした。

箱の中から

ちかちかと点滅する蛍光灯に照らされて。
わたしは畳の上で固まっていた。

――今、確かに押入れの開く音が聞こえた。

気のせいかもしれない。
気のせいだと思いたい。

ほんの少し首を右に動かせば確かめられることなのに、どうしてもできない。
家全体が、小刻みに鳴っている。

カタカタ、カタカタ。
カタカタ、ガタガタ。

それに自分の歯が震えて立てる音が重なって。

眼だけがぐるぐると天井を回り。

「あ、あ……」

人としての思考を放棄しそうになったその時。

「えいっ」

わたしの視界に白い粒が舞った。
見開いた目の中に、塩の粒が落ちる。

「えいっ。えいっ。えいっ」

傷の入ったCDのように、聡子ちゃんが全く同じ掛け声を上げて塩を撒いている。

その先にわたしがいることなど、お構い無しに。

塩が染みて目を閉じたわたしの耳に、何かの物音が聞こえた。

畳に爪を立て、重い物体を引き摺るような音。

生暖かい息が、わたしを取り巻く空気を揺らしている。

『由美は助からんよ』

頭の中で、晃の声が再生された。

物音はどんどん近付いて、荒い息もはっきり聞き取れる。

嫌。こんなところで死ぬなんて。

何かが腕に触れて、絶望したその時。

ひゅんと空気を切る音がして、何かは畳の上を転がった。

この世のものとは思えない呻き声を上げて、何かはのたうちまわっている。

聡子ちゃんの足音と、何かが引き摺られる音。

押入れがぴしゃりと閉められた。

はぁはぁと、聡子ちゃんの息遣いが聞こえる。

恐る恐る目を開くと、聡子ちゃんが押入れのふすまをしっかり押さえていた。

隙間から、何か黒い長いものがはみ出ている。

「さ、聡子ちゃん……？」

「どうして出てくるの――ちゃんと閉じ込めたのに――。どうしてついてくるの――？」

濡れた髪を振り乱し、聡子ちゃんは押入れを睨んでいた。

いったい、どういうこと？

わけがわからない。

乱れる感情の原因は。

屋鳴りの原因は。

壁や天井から染み出てくるものの原因は。

聡子ちゃんそのものではなくて。

聡子ちゃんについてきているもの？

カタカタと鳴り続ける押入れ。

それを見詰めるわたしの背後、聡子ちゃんのボストンバッグから微かな物音が聞こえた。

聡子ちゃんは押入れに夢中で気付いていない。

そっと振り返ると、ボストンバッグが動いている。

「な、何……」

バッグ自体が動いているのではなく。

中に何かが入っている。
聡子ちゃんの様子を盗み見ながら、震える手でボストンバッグを開ける。
鼻の曲がるような生臭い匂い。
きつく結ばれたビニール袋の中には、既に腐敗し始めている薄い何か。
そして、濁った二つの球体。
それらが、炭と一緒にバッグに詰められていた。
「これは……」
手の中で蠢くものたちを見つめて。
頭の中で何かが繋がった。
晴香から聞いたニュース。
絶対に家に帰ろうとしない聡子ちゃん。
箱に入れられて見つかった女子大生の死体。
削り取られた顔。
わたしの顔の傷。
聡子ちゃんが塩を撒く意味。
事件現場の近くに住んでいると言った。
もう何人も行方不明だと言った。
そしてさっき、『閉じ込めたのに』と言った。『ついてくる』と言った。
ビニール袋が破れ、蠢く中身が一直線に聡子ちゃんのもとへ這っ

ていく。
球体がころころと転がっていく。
それを追うように、わたしは聡子ちゃんを見た。
押入れの中の何かを押さえつける、華奢な殺人鬼を。
カタカタ、カタカタ、と、押入れが鳴っている。
聡子ちゃんはそれに気を取られて、わたしが近付いていることに気付かない。
「……」
足元に落ちていた炒飯皿を拾う。
揺れる感情の波は最高潮に達して、今にも心臓がはじけそうだった。
この音は、北の部屋の染みやお風呂場の液体は、全てサインだったんだ。
彼女に殺された誰かからの。
躊躇うつもりはなかった。
彼女はわたしも殺そうとしたんだ。
頬の傷がずきずきと痛む。
「うっ」
無言で振り下ろした皿が彼女の左側頭部に当たり、呻き声が上がった。
押入れを押さえていた手で頭を押さえている。
白い指の間から、赤い液体が流れた。

押入れが内側から開き、よくわからないもやのようなものがこっちに伸びてくる。

「な、なにするの。由美ちゃんひどい……」

することは分かっていた。

半分ほど開いた押入れへ、抵抗する聡子ちゃんを押し込む。

細い足をじたばたと動かしていたけれど、頭に怪我をしたせいか、簡単に押さえ込めた。

「やめて！　いや！　放してってば！」

いつの間にか、立場が逆転していた。

怯えるのは彼女、追い込むのはわたし。

泣き叫ぶ彼女を見て少し罪悪感が湧いたけれど。

そんなものはここ数日の間に積み重なった怒りで消されてしまった。

ほんとに、ずうずうしい。

自分がしたことから逃げるために、わざわざわたしのところまでやってくるなんて。

その上、わたしを殺そうとまでしていた。

「開けて！　はやく開けてよ！　ねぇ、ここから出して！」

ぴったりと閉めた押入れを、彼女が内側から叩いている。

やがて真っ暗な押入れの中から悲鳴が上がり、何も聞こえなくなった。

家鳴りもおさまって。
わたし以外誰もいない家は、しんと静まり返った。
「……」
沈黙した押入れを見詰め、そっと手を放す。
何も起こらない。
机の上で、わたしの携帯電話が鳴った。
「――！」
びくんと体が震え、携帯電話まで走る。
液晶画面にはお父さんの名前が出ていた。
「も、もしもし――」
『おう由美か。元気にしてるか？　昨日の朝電話したようだけど、急ぎの用事でもあったのか』
電話の向こうでは、ラジオの音。
仕事の帰りに、路肩に停車して電話しているらしい。
昔から変わらない音に、張り詰めていた何かが緩んだ。
「お、お父さん、あのね……」
喉から嗚咽が上がり、ぽろぽろと涙が零れた。
涙を拭こうとした手が、生臭い。

電話の向こうでは、お父さんが驚いた声を出している。

『どうした？　何かあったんだな？　』

そう。

人殺しがやってきて。

殺されそうになった。

止め処なく溢れる涙が喉を締め付けて、うまく声が出せない。

ただ泣きじゃくるばかりのわたしに、お父さんもただならぬ雰囲気を感じ取ったみたいだった。

『大学でうまくいってないのか？　』

「……ううん」

『何か怖い目にあったのか？　』

「……うん」

『なんだって？　……ちゃんと警察に相談したか？　』

「ううん……友達には相談したの」

『最近、由美の大学の近くで変な事件があったじゃないか。危ないことがあったら、すぐ警察に――』

「そのことで、困ってるの……」

お父さんが沈黙する。
困惑して押し黙っている様子が目に浮かぶ。
うーむ、とうなる声が聞こえた。
『――待ってろ、父さん今から高速乗ってそっちに行くから。二時間ぐらいかかるけど、家で待ってるんだぞ。しっかり戸締りして、父さん以外の人が来ても応対しちゃいかんぞ』
「……わかった」
通話が終わり、再び静寂が訪れた。
さっきとは違った静けさ。
お父さんが来てくれると言っただけで、大分気持ちが落ち着いた。
安堵で胸を撫で下ろすと、わたしはそっとテレビの電源を入れた。

あとのまつり

色とりどりの光が踊るテレビをぼんやりと眺め。
テレビ上部に流れるテロップを見て、わたしは凍りついた。

「……」

速報、と頭についた文字列が、ゆっくりと画面を横切っていく。
そこには女子大生殺人事件の新たな、それも急な展開が伝えられていた。

『【ニュース速報】E県T市にて二十代男、死体遺棄現行犯逮捕。×大女子学生殺害を自白。……』

どういうこと？
頭の中が真白になった。

テレビに流れていることは多分本当だ。
だったら、聡子ちゃんが押入れに閉じ込めようとしていたものは何？
聡子ちゃんは人殺しじゃない？

カタ、と背後で物音がした。

押入れの、中から。

振り向くわたしの目の前で、ぴったり閉じていた押入れが少しだけ開く。
そう、指一本分。

細くて白い、聡子ちゃんの。
カタカタと、自分が震えているのがわかった。
どうしよう。
生臭い液体で汚れた両手を見詰め、生唾を飲む。
押入れが鳴っている。
わたしを呼ぶ声が聞こえる。
聡子ちゃんの、声。
「いや……やめて……」
耳を塞いでも聞こえてくる、『ここから出して』という叫び声。
「違う、わたしが悪いんじゃない――」
聡子ちゃんが紛らわしいことするから。
けれど、そんな言い訳で音が鳴り止むはずもなく。
少しずつ、少しずつ、押入れは開いていく。
暗闇の中から、わたしに向けられる視線を感じる。
「……っ」
いつのまにか、わたしは近くのバッグに荷物を詰めていた。
はやく、ここから出ないと。
押入れのないところへ逃げないと。

あと数時間したらお父さんが来る。
でも、実家は押入れだらけだ。

携帯電話を握り締め、わたしは玄関から走り出た。
背中で押さえた玄関扉を、何かがドンドンと叩く音がする。
振動が体に伝わる。

家に、帰れない。

気のせいか赤い廊下に座り込み、わたしは空を仰いだ。
逃げ続けなくては。
どこか、押入れの無いところに。

誰か、泊めてくれるところに。

実家は駄目。晴香の家にも行けない。
わたしの脳裏に、一人暮らしの知り合いの名前が浮かんだ。
そうだ、あの子なら。
震える手で携帯電話を開き、アドレス帳でま行を探す。

確かワンルームに住んでいると言った。
白いフローリングだと自慢げに話していた。
友達じゃない。
友達の友達。
だから。

「……ちょっとぐらい巻き込んだっていいじゃない」

アドレス帳の中に見つけた、彼女の名前は――

音の正体

マグカップの中の液体を、男はベランダの排水溝にとろとろと流し込んでいた。

「……」

短くなったタバコを片手に、ゆっくりと流れる液体を見詰めている。

二、三回振って中身が無くなったことを確かめると、男は雑巾で排水溝を拭いた。

念入りに、何度も何度も。

これで前回の分は終わった。

そう男は思った。

ベランダから居間へ上がり、防音布を張ったガラス戸を閉める。

部屋の中には何台ものミキサーが汚れたまま放置してあった。

何かが暴れる音がして、机の上のミキサーがカタカタと揺れる。

男は濁った目で押入れを見ると、何も言わずにマグカップを洗いはじめた。

水音を上回る大きな音が押入れから聞こえている。

マグカップを洗い終え、男は押入れに向かった。

途中、通り過ぎた机の上にパソコンがある。

チャットツールが開きっぱなしになっていて、今も会話が続いて

いた。
会話のログが流れるウィンドウの横には、フレンドリストらしき一覧が開かれている。
ログインしている人の名前は青、ログアウトしている人のは赤で表示されているようだ。
赤い名前の中に、＊ｌｉｇｈｔ０４＊という名前があった。その横には、２６と数字が表示されている。

静かになった押入れから体を出すと、男は切り取った何かをミキサーの中に入れた。
ソファに座り、スープだけ残したラーメンの器を手に取る。
スープをミキサーの中に半分注ぐと、電源を入れた。

勢いよく回転する刃が中の物を切り刻み、どろどろの液体へと変えていく。
それを見届けると、男は木板でできた箱を組み立て始めた。
ゴム製のハンマーが釘を打ち込み、低い振動が床を伝わる。

それに抵抗するかのように、押入れが小さく揺れた。
カタカタ、カタカタ、と。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4192m/

おしいれ。

2010年11月2日04時36分発行